薔薇薔薇団物語

sky

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
薔薇薔薇団物語

【Ｎコード】
Ｎ３５０１Ｕ

【作者名】
ｓｋｙ

【あらすじ】
普通じゃない少年「ｋｙｏｎ」の日常の話。というより、その日常は既に超常になっていた――。
ビミョーに非日常系学園ストーリー！？

椎名ｋｙｏｎの憂鬱　プロローグ（前書き）

ｓｋｙ「はじめまして！ｓｋｙです。学生なので更新が遅くなると思いますがご了承ください」
京「では…」
ｓｋｙ&京「薔薇薔薇団物語レディィーゴー！！」

椎名ｋｙｏｎの憂鬱　プロローグ

サンタクロースをいつまで信じていたかなんてことはたわいもない世間話にもならないくらいのどうでもいいような話だが、それでも僕がいつまでサンタなどという赤服じーさんを信じていたかと言うとサンタクロースの元となる人が昔いた訳であり、今いるかという話はまた別の話である。

しかし、グリーンランドサンタクロース協会にサンタクロースと認められている人は日本にもいるわけであり、僕はその人に会ったことがある。

でも、その人はサンタクロースと認められているだけでありサンタクロースなのかというとサンタクロースではないと思っていた。あと、宇宙人や未来人や幽霊や妖怪や超能力者などがこの世に存在しないのだということも分かっていた。

その考えは去年の春に消えてしまった。ある事件が起こったからだ。僕はその事件で『超能力（というより魔法）』を使えるようになった。

その話また今度するとして、今はこれからのことを考えるとしよう。

そんなことを頭の片隅でぼんやり考えながら僕はたいした感慨もなく中二になり、フローラ・スカーレットと出会った。

おっと、自己紹介を忘れるところだった。

僕は椎名京。不思議な力を使える中学二年生だ。

椎名ｋｙｏｎの憂鬱　プロローグ（後書き）

ｓｋｙ「この小説を読んでいただきありがとうございます」

京「できれば、感想をもらえると嬉しいです。作者のやる気が上がります」

ｓｋｙ「これからこの小説をよろしくお願いします」

椎名ｋｙｏｎの憂鬱　第一章（前書き）

ｓｋｙ「今回は新しい登場人物が２人（片方は前回名前だけ登場済み）が出てきます」

京「では、本編どうぞ」

椎名ｋｙｏｎの憂鬱　第一章

「また、この席か…」
そう言って僕は窓側の一番後ろの席に座った。前の学年の時も同じ席だったのだ。
「ここの席の人？はじめまして！私、フローラ・スカーレット♪」
と、前の席の人が話しかけてきた。
「はじめまして。僕は椎名京。よろしく」
「よろしく！京君か…。じゃあ、ｋｙｏｎ君って呼ぶね♪」
どうやらフローラは、語尾に♪を付けるのが癖のようだ、というより今ｋｙｏｎって言ったな。
僕が前からｋｙｏｎと呼ばれてたのを知ってたのか？って違うよな。
その後は普通に授業があり、特に変わったことは無かった。初日から授業は無いって？じゃあ、クラス全員の自己紹介をしたり、係など決めなくてはいけないことを決めたりしてたとでも思っていてくれ。

そして放課後、僕とフローラは帰る前に校庭で話していた。
「ｋｙｏｎって何か部活やってるの？」
「やってないけど…」
「私もやってないんだ♪同じだね♪」
「それなら、一緒に部活始めない？」
「いいけど、面白い部活無かったよ？」
フローラの面白いの基準が何かは訊かないでおこう。
「じゃあ、新しく部活創らない？」
「いいね！面白そう♪」
「明日の放課後までに部室探しておくから」
「ＯＫ♪」

先に創部申請して部室もらえよ、と思うかもしれないが、この学校では部員が最低四人いないと部と認められない。だから、部員が四人集まるまでどこかに部室（仮）を創るという考えだ。
そういう訳で僕は、部室を借りにまず「将棋・オセロ部」へ行った。この「将棋・オセロ部」は去年、先輩が全員卒業してしまい現在一人なので、今年十二月までに部員が四人いないと廃部という状況で、その一人が僕の友達なので、貸してくれる率が高いと考えたのだろう。
「あ！ｋｙｏｎ！入部してくれる気になった？」
中に入ると「将棋・オセロ部」の唯一の部員津田流（通称つだっち）が話しかけてきた。
「そうじゃなくて、新しく部活を作ろうと思ってるんだけど、ちゃんと部室をもらえるまで部室を貸してくれない？」
「ｋｙｏｎがこの部に正式に入部してくれるならいいよ。あと、面白そうだからオレもその部に入れてよ」
「ありがとう。交渉成立ってことでいいんだね。また明日～」
普通は貸してくれないだろうが、向こうも部員不足だし面白いものが好きだから貸してくれたのだろう。

椎名ｋｙｏｎの憂鬱　第一章（後書き）

ｓｋｙ「今回は新登場人物のフローラ・スカーレットさんと津田流君に来てもらってます」
流「どうもー」
フローラ「こんにちは～♪」
京「ｓｋｙ。やりたいことがあるんだけどいい？」
ｓｋｙ「別にいいけど」
京「フローラ来て」
フローラ「ＯＫ♪」

フローラ「次回、薔薇薔薇団物語第２話♪」
京「違う！次回、薔薇薔薇団物語第３話。椎名ｋｙｏｎの憂鬱　第二章。
　薔薇薔薇団団員４人目が登場！」
フローラ「お楽しみに♪」

椎名ｋｙｏｎの憂鬱　第二章（前書き）

ｓｋｙ「前回の予告通り、団員４人目が登場します」

京「それでは、本編スタート」

椎名ｋｙｏｎの憂鬱　第二章

「部室見つけた？」
朝、学校に行くとフローラが訊いてきた。
「うん。結構広いところだよ」
「それじゃ、放課後に行ってみよう」
そこで担任が入ってきて会話が終わった。

その日の放課後、僕とフローラは「将棋・オセロ部」の前にいる。
「ここって「将棋・オセロ部」だよね？」
まあ、その反応は普通だろう。そこで、僕は部室を借りるまでを話した。
「とにかく行こう」
そう言って、僕はフローラと一緒に部室に入った。
「やっと来たか。って、その人は？」
部室に入ると、つだっちが話しかけてきた。
「どうも、はじめまして！フローラです♪」
「はじめまして。津田流です」
「津田君だから、つだっちね♪」
僕のときは偶々当てたのかもしれないと思ったけどそれが続くとなぁ…。
「今のところ、メンバーは三人だ！」
「部活創るのって四人必要だったような…」
「もう一人部員探してくる」
と言って、僕は部室を出て行った。

しかし、あてが無く僕は廊下でどうするか困っていた。その時、ある一人の少年が現れた。
「あ！ｋｙｏｎ！どうしたの？」

この少年の名は点×点。少し前に仲良くなったのだ。
「点×点、僕が新しく創った部に入ってほしいんだけど…」
「いいよ～」
「じゃあ、部室に行こう」
僕はそう言ってから、点×点を連れて部室に行った。

「四人目連れてきたよー」
「点×点君、久しぶりー♪」
「四人目って、点×点か…」
二人とも点×点と知り合いだったようだ。
点×点はつだっちの文句を気にせずに、
「ｋｙｏｎのことだから部の名前って決めて無いでしょ？」
と訊いた。
「世界の面白いことを探す椎名ｋｙｏｎの団。略してＳＯＳ団」
「だーめ」
駄目なのは分かってたよ。でも、「だーめ」って言われると「にょろーん」って言いたくなるじゃないか。もう我慢できん
「にょろーん」
あー、言っちゃった。そうなると、あの名前でも使うか。
「じゃあ、薔薇薔薇団」
「結構いい名前だね～♪」
これならパクリとかの心配は無いはずだ。グーグル検索しても、観覧不可のはてなグループと友達同士でたまに書き込んでる掲示板化したチャットくらいしか無いからな。
「じゃあ、決定！それで活動目的は、宇宙人、未来人、異世界人、超能力者を探すってことで」
「……」
「……」
今の三点リーダは、つだっちと点×点のだ。
つだっち僕と同じ事件で超能力者になったから沈黙の理由は分か

る。点×点は謎だ。

「面白そう♪」

「じゃあ、決定！！」

黙ってるってことは意見が無いって思っていいよな。多分、何も言えないだけだけど。

「今日はもう解散！」

僕がそう言うと、皆帰って行った。

そして点×点は、僕の近くを通るとき、

「今日、午後に公園で待つ」

と僕にしか聞こえないように小声で言った。

椎名ｋｙｏｎの憂鬱　第二章（後書き）

点×点「ここが後書きか。次回予告、一人でやっちゃおうかな」

点×点「次回、薔薇薔薇団物語第四話　見てね」

椎名ｋｙｏｎの憂鬱　第三章（前書き）

京「前回の予告、点×点に取られた～」
ｓｋｙ「残念だったね」
京「まあ、いっか」

普通なら、公園と言われてもどこの公園だか分からないが、幸いこの近くに公園と呼べる公園は一つしかない。空き地なら、たくさんあるがな。
四月といってもまだ寒いので人は少なく、楽に点×点を見つけられた。
「で、何の用？」
「ここは寒いから俺の家に来て」
と言って、点×点は歩き出す。僕もついていき、数分後、点×点が立ち止った。そこには、普通のマンションがあった。玄関口のロックをテンキーのパスワードで解除してガラス戸を開ける。そして、エレベーターに乗り七階へ行った。
「ここだよ」
やっと点×点が口を開いた。それで、ドアを開けている。
「入って」
僕は点×点に言われた通り中へ入った。内装は極普通の部屋だ。２ＬＤＫくらいか？リビングにはコタツ机が真ん中に置いてある。
「座って」
点×点はそう言って座った。僕はコタツを挟んで反対側に座る。
「家の人は？」
「一人暮らしだからいない」
「へぇ、それで僕を呼んだ理由って何？学校じゃ言えないようなこと？」
「そう、俺のこと。それと、フローラさんのこと」
「お前とフローラがどうかしたのか？」
「うまく言語化できない。情報の伝達に齟齬が発生するかもしれない。でも聞いて」
「何？」

「齟齬ってどういう意味？」
「…。早く本題に入れ」
そして、点×点は話し出した。

「俺とフローラさんは普通の人間じゃない」
いきなり妙なことを言い出した。僕も普通の人間じゃないから別に驚かないけど。
「そんなこと言ったら薔薇薔薇団全員普通じゃないじゃん」
「……え…？」
点×点は驚いた表情で僕を見ている。
「続けて」
「ｋｙｏｎは珠雷の星って知ってる？」
珠雷の星…。火星の近くにある小惑星か…。知ってるけど知らないふりしてた方がいいな。
「やっぱり知らないか。珠雷の星っていうのは火星の近くにある星で、俺はそこの人間なんだ。他の星の人からは、火星周辺の人をまとめてフレイマーと呼ばれてるんだ」
これで、宇宙人は完了か…
「次はフローラの話だけど、あの人は自分で気づいていないだけでもの凄い力をもってるんだ」
何、そのどこかの小説みたいな設定？
「俺は、その力を暴走しないように見守るのが役目」
やっぱり…
「別に変な意味じゃないよ」
変な意味ってなんだよ。
「なんで、僕にそんな話をするの？フローラに直接話せばいいんじゃない？」
「フローラさんに言ったところで信じないだろうし、自覚されるとこっちとしても困るし。あと、今フローラさんの近くにいるのがｋｙｏｎだから。危機が迫るとしたらまずｋｙｏｎ、お前なんだ」

「なんとなく話は分かった。そろそろ時間だから帰るよ」
そう言って、僕は家に帰った。

椎名ｋｙｏｎの憂鬱　第三章（後書き）

フローラ「次回、薔薇薔薇団物語第四話」
京「違ーう。次回、薔薇薔薇団物語第五話　椎名ｋｙｏｎの憂鬱第四章」
ｓｋｙ「次は、極普通な日常の話です。お楽しみに」

椎名ｋｙｏｎの憂鬱　第四章（前書き）

ｓｋｙ「ねぇねぇｋｙｏｎ君、モッツァレラチーズはあるかい？」

京「だーめ。って、なんでモッツァレラ？」

ｓｋｙ「にょろーん」

京「こんな作者はほっといて、本編どうぞ」

椎名ｋｙｏｎの憂鬱　第四章

次の日の放課後、部室に行くとつだっちは一人将棋をしていた。
「あれ？今日は一人？」
「点×点は掃除当番だから遅れるって。それより、昨日の夜点×点と話してたでしょ」
「うん。そうだけど」
「あいつ、実は宇宙人だから」
「知ってる。でも、証拠は無いんだけどね」
そう言って、つだっちの反対側の席に座った。別に指定席ではないが、いつも同じ席に座っている。
「昨日の話ってやっぱりそれだったんだ」
「つだっちも点×点から聞いたの？」
「いや。ちょっと、そんな話を知り合いから聞いてね」
「まぁ、どんな知り合いかは訊かないでおくよ」
『機関』とか言われると困るからな。
「それは、いつか話すから。そんなことより、オレもｋｙｏｎに言わなくちゃいけないことがあるんだけど…」
「何？」
「実はオレ、超能ｒｙ…」
「知ってる」
つだっちの話の途中で僕は言葉を遮った。つだっちが能力を得た時、僕もいたんだから忘れてない限り知ってるでしょ。
「話を最後まで聞いてくれたっていいじゃないか」
「あ、フローラさんまだ来て無いんだ」
そう言って点×点が部室に入ってきた。そして、つだっちの隣に座った。そういえば、前回もそこに座ってたな…。そこから数分後、フローラが来た。
「ごめーん♪遅れちゃった～！」

そうして僕の隣に座った。
その日の部活は、僕とつだっちは将棋をして、点×点それを見ていて、フローラは本を読んでいた。点×点も「将棋・オセロ部」に入ればいいのにね。

そして、その日の帰りつだっちが変な話をしてきた。
「超能力者の証拠見せようか？」
「何度も見たから！」
「新しい能力だよ」
「何？」
「スプーン曲げ」
僕はどうでもよかったのでスルーした。

また、次の日の放課後。
「あ…教室に忘れ物した…。取ってくる」
そう言って僕は教室へ向かった。

その時はまだこの後に起きる悪夢を知る余地は無かった…

椎名ｋｙｏｎの憂鬱　第四章（後書き）

フローラ「次回、ベガイスターの冒険第一話」
京「全然違う。次回、薔薇薔薇団物語第六話　椎名ｋｙｏｎの憂鬱
第五章　前編
　それより、ベガイスターってドイツ語で敗者って意味だろ。
　何故そんな奴が冒険する？」

椎名ｋｙｏｎの憂鬱　第五章　前編（前書き）

ｓｋｙ「今回は今までより長かったので、前後編にしましたー」

京「今まで短かっただけだろ」

ｓｋｙ「ギクッ」

京「では、本編どうぞ」

「ＷＡＷＡＷＡわっすれっもの〜。僕の忘れ物〜」
そんな変な歌を歌いながら教室へ入っていった僕は驚いた。
「遅かったね」
「何をやってる！カダブアキ！！」
そこにいたのは僕が図書室で借りたラノベを持った、クラスメートの潟辺秋（通称カダブアキ）だった。
「何って…君が来るのを待ってただけだ」
「何のようだ？」
「用があるのは確かなんだけど、ちょっと訊きたいことがある」
「そういう前振りは置いといて本題からお願い」
「わかったよ」
「それで何？」
「人間はさあ、よく『やらなくて後悔するよりも、やって後悔したほうがいい』って言うけどどう思う？」
「前振りはいいっての。それより、本返して」
僕はカダブアキが持ってる本を指して言った。
「君ってこんな本読んでたんだ。これは返すよ」
そう言ってカダブアキは本を返した。
「あともう一つ、たとえ話なんだけど…」
「前振りはいいって」
「寿命が縮まったとしても？」
「え…何が言いたいの？」
「観察対象のフローラは何も変化しないし、点×点との勝負の前に邪魔者を消しておこうと思ってね」
後ろに隠されていたカダブアキの右手が一閃、さっきまで僕の首があった空間に鈍い金属音を薙いだ。
何かを企んでいるような笑みで、カダブアキはナイフを振りかざ

した。その瞬間、僕は脱兎の如く走り出し、壁に激突した。
「あれ？ドアも窓も無い…」
廊下側に面した壁は、一面灰色に染まっていた。
「無駄無駄」
背後から声が近づいてくる。
「脱出路は封鎖した。この惑星の建造物なんて、少しだけ分子情報をいじれば楽に改変できる」
校庭側の窓もコンクリートになっていた。
「諦めて。結果はどうせ同じになるんだから」
僕はじりじりと机の間をぬってカダブアキから少しでも離れようとする。しかし、カダブアキは一直線に僕に向かってきた。
「最初からこうしておけばよかった」
その言葉で体が動かなくなったのを知る。
「じゃあ死んで」
カダブアキがナイフを構える気配。
その時。
「空気砲！」
という声がした後、壁をぶち破るような音と共に瓦礫の山が降ってきた。その衝撃で体が動くようになったようだ。
「ｋｙｏｎ！大丈夫？」
そこにいたのは、つだっちと点×点。
「敵が増えたところでこの空間では関係ない」
そう言ってナイフを振りおろしてきた。しかし、その瞬間カダブアキが持っていたナイフは空気砲ミニ（命名点×点）によって粉々になった。
「邪魔する気？」
「決着がつくまでおとなしくしてるって約束したはず。独断専行は許可されていない」
「嫌だと言ったら？」
「倒して止めるまで」

「やってみる? ここでは、俺の方が有利だ。この教室は俺のクラス」

「ううう…」

そう言って点×点は口喧嘩(?)に負けてしまった。それより、カダブアキの理由はおかしいだろ。

椎名ｋｙｏｎの憂鬱　第五章　前編（後書き）

フローラ「次回、薔薇薔薇団物語第六話」
京「違ーう。次回、薔薇薔薇団物語第七話　椎名ｋｙｏｎの憂鬱第五章　後編」
フローラ「ベガイスターはいつ出してくれるの？」
ｓｋｙ「出たとしてもその回限りの脇役だろうね」
フローラ「ガーン」Σ（゜Д゜——）
京「この作者のことだから、ネタが詰まるとすぐ出すと思うけど」
ｓｋｙ「一応、夏休み編までは考えてある」
フローラ「ガーン」Σ（゜Д゜——）

椎名ｋｙｏｎの憂鬱　第五章　後編（前書き）

ｓｋｙ「はい。後編です。どうぞ」

点×点とカダブアキの戦闘中、僕とつだっちは…
「なんでｋｙｏｎは超能力を使わなかったの？」
「ここは密室だったから、外との情報通信ができなかった」
「そっか…」
「でも、今なら穴が空いたからどうにかなる。カダブアキ！覚悟！！」
　そう言って、僕はカダブアキを指さした。
「ああ、できるさ」
「次は君か…。さっきは逃げまくってばかりだったのに、今は何か出来るのか？」
「そうか…。君に自信があるなら遠慮なくいかせてもらうよ」
「じゃあ、こっちも。禁則事項の一部解除を申請」
「そ…それは……」
「ネットワークシステム『因果律』に接続。パーソナルネームカダブアキを敵性と判定。当該対象の有機情報を削除する」
　教室の中はもうまともな空間ではなくなっていた。何もかもが幾何学模様と化して湾曲し、渦を巻いて躍っている。
「その前に君を殺せばいいだけの話」
　ヒュンと風切り音。
「グランドウォール！」
　つだっちは、そう言って下の方から壁を出現させた。
「邪魔だなぁ。君から先に殺ってあげようか？こんなのはどう？」
　次の瞬間、つだっちの身体が一ダースほどの茶色の槍に貫かれていた。
　その直後、つだっちの身体は光り四方八方に飛び散って消え、カダブアキの背後に現れた。
「な…なに！」

「瞬間移動と身代わりの術の合わせ技さ」
そう言って、つだっちはカダブアキの腕をつかみ床に叩きつけた。
今ので肋骨二、三本折れただろう。
「そろそろやっちゃっていい？」
「ＯＫ」
そう言うと、つだっちはカダブアキから離れた。
「情報削除、開始」
「そんな……」
天井から降る結晶の粒を浴びながら、今度こそカダブアキは驚愕の様子だった。
同じく結晶化していく両腕を眺めながらカダブアキは観念したように言葉を吐いた。
「あーあ、残念。膠着状態をどうにかするチャンスだとおもったのに。俺の負け。よかったね。延命できて。でも気を付けて。フレイマーは、この通り、一枚岩じゃない。相反する意識をいくつか持っている。まぁ、これは地球人も同じだけど。いつかまた俺みたいな急進派が来るかもしれない」
カダブアキの首から下は既に結晶に覆われていた。
「それまで、フローラとお幸せに。じゃあね」
音も無くカダブアキは小さな砂場となった。一粒一粒の結晶は更に分解、やがて目に見えなくなるまでになる。
さらさらと流れ落ちるガラスのような結晶が降る中、カダブアキという男子生徒はこの日本から存在ごと消滅した。
その直後、目の前が真っ暗になり僕は倒れた。
「おい！ｋｙｏｎ、大丈夫か？」
「大丈夫。疲れただけだから。大丈夫じゃないのはこの空間」
その時には、もう砂の崩落は止まっていた。
「教室を再構成する」
見る間に幾何学模様空間が見慣れた教室へと戻っていく。
「カダブアキのことはどうするの？」

「ちょっと待って。カダブアキは転校したことにするから。それより、早く戻ろう。フローラ待ってるんでしょ？」
「フローラさんなら何か用があるらしくて先に帰ったよ。それでも、もう遅いから帰ったほうがいいでしょ」
「なら、点×点はどうする？」
その時、点×点は部屋の片隅で落ち込んでいた。
「置いていくか…」
そう言って、僕たちは教室を出た。後から、点×点が追いかけてきたのは言うまでもない

椎名ｋｙｏｎの憂鬱　第五章　後編（後書き）

フローラ「次回、ＢＢＤＭ第七話」
京「略すな。次回、薔薇薔薇団物語第八話　椎名ｋｙｏｎの憂鬱
第六章　前編」
ｓｋｙ「ここからほとんど前後編になるかも…」

？？？「そろそろ私も出たいんだけどな」
？？？「貴様はまだいいさ。そろそろ出られるんだから。
　私の出番はまだまだ先さ」
ｓｋｙ「できるだけ早く出してあげるから」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3501u/

薔薇薔薇団物語

2011年6月29日03時25分発行